

第 4 講：教えに基づく環境保護活動の実践例

はじめに

今日、環境問題は多岐にわたって起きている。とりわけ私たちの身体内に及ぼす環境汚染問題も深刻化を増している。東電福島第 1 原発が本年 3 月 11 日の東日本大震災発生直後に引き起こした放射性物質の放出事故は、エネルギー生産システムの根本的議論を促しているだけでなく、身体内・外の被曝が深刻な環境問題であることを、私たちに警告する結果となった。

もちろんグローバルな地球温暖化や気候変動など、あるいはローカルで身近なごみ問題なども、「世界は鏡」として世上に映し出された重要な環境問題であることに変わりはない。

環境保護を考えるさい、「教え」から何を学ぶべきか

天理教の教えに基づいて環境問題を読み解くさい、わかりやすく説かれている本として『稿本 天理教教祖伝逸話篇』がある。この本にはさまざまな事例が具体的に紹介されている。

「64 やんわり伸ばしたら」では、皺紙になって捨てられるような紙でも、やんわり皺を伸ばしたら綺麗になって再び使えるようになる。どんなものでもこの世には何一つ要らないというものはない。知恵と工夫で物を生かし続けることができる。

「112 一に愛想」では、菜の葉一枚でもおいしく食べ、決して粗末にしないようにすること。捨てられていた野菜を食べることによって、野菜の「いのち」は私たちの「いのち」へとつながられていく。そのように食べ物を最後まで食べきることは決して卑しいことではないこと。

「132 おいしいと言うて」では、私たちは食事のさい、食べ物に対して「おいしい、おいしい」と言ってあげることが大切で、人間に「おいしい」と言って食べられると、その食べ物は今度は出世して生まれかわること。

「138 物は大切に」では、物を大切にしたり生かして使うことが重要なのは、この世の全てのものが親神様から私たちに与えられた大切なものであるからである。

環境保護を実践するさい、「教え」から何を学ぶべきか

天理教の教えに基づいて環境保護を実践するさい、「おさしづ」に多くのヒントが隠されている。その隠されたヒントを読み解くことも重要である。たとえば、「一手一つに皆結んでくれるなら、どんな守護もする」(明治 31 年 1 月 19 日)とある。「陽気ぐらし」に向けたどのような活動でも、心が一つになれば親神様はどのような守護もしてくださる。

また『天理教教典』には、「一手一つの心に、自由の守護が頂ける。いかに多くのものが相集っても、一手一つの理を欠くならば、親神に受け取って頂けない。人皆、相互に一つの道の理に心を合せ、互立で合い助け合うてこそ、陽気に勇んで生活して行ける」とある。これは、どのような活動でも、互いの思いと心をつ一つにして助け合ってこそ親神様からのご守護が得られ、またそうした姿が親神様の望まれる「陽気ぐらし」世界への道であることを意味している。

ご守護を得たいのであれば、お互いが立て合い、助け合うことが大事で、これによって自ら陽気に勇み、周囲を勇ませることができる。これは「陽気ぐらし」実現にとっても大切な心得なのである。

勇み・勇ませることが基本

『改訂 天理教事典』によると、「いさむ」の意味は、「勇み立つ。勇気をふるいおこす。積極的、意欲的に生きること。『たんのう』の心が治まるとき湧いてくる心のあり方。『成人』した心の状態。『いさむ』の反対」とある。また「どんな事態に直面しても、すべて親神の思わくと悟り喜び勇んで生きること。いさんだ心で勇んだ生き方をすることは、親神の思召にかなう生き方であり、信仰に根ざした生き方である。それは信仰の目標でもある。そして、みんなの心が勇むとき『陽気ぐらし』の守護をいただくことができる。教祖の『ひながた』は勇んだ生き方のモデルであり、天理教信仰者が少しでもそれに近づきたいと願う目標である」とある。

(1) 「勇む」にはどうすればいいのか?

私たちは、勇めば「陽気ぐらし」のご守護が得られるということを中心に治めるべきである。また、環境保護は「陽気ぐらし」実現には必要な要件であり、そのための活動には自ら勇み、周囲を勇ませることが重要だと考える。そのことによって、「一手一つ」の心が私たちのなかに醸成されるのである。すなわち、①親神様による人間創造の思いや人間のたすかる道を悟り、②親神様の教えをしっかりと理解し、③親神様の待ちわびられる「成人」ととげ、④教えが世界中に広がり、⑤「つとめ人衆」がみな揃って親神様の教え通りの「つとめ」をし、⑥神一条の心で生きることが重要であり、そうした思いによって、行動する人と人との関わりが互いを勇ませ合うことになる。

(2) 「勇む」とどのようにするのか?

私たちの心が勇んでくると、①親神様の心も勇まれる。そして②神の心と人間の心がだんだん勇んでくると、健康と繁栄のご守護をいただくことができるようになり、世界中の人々の心がだんだんと勇んでくると、世界中の生産は豊かになり、家業も繁栄し、農作物は豊作となる。このように、人が勇めば神も勇み、神が勇めば万物が生き返り、人間が勇むという相互作用が展開する。

もちろん、勇むことは人間の力だけでできることではない。親神様の働きがあってはじめて本当に勇めるのである。親神様が勇めるよう守護して下さるからである。勇む心は陽気な心であり、勇んだ心で生きることが「陽気ぐらし」である。しかし自分一人だけが勇んで楽しみ、逆に周囲の人がいさむのであれば、本当の「陽気ぐらし」とは言えない。

みんな揃って勇むことが真の「陽気ぐらし」なのである。

『環境市民ネットワーク天理』での実践

平成 9 年 12 月 17 日、環境市民ネットワーク天理は、天理市民や企業、行政の三者による「協働 (パートナーシップ)」を生かした環境保護実現のために発足した。

この環境 NGO (現在は NPO) が 14 年余継続できたのは、①行政にだけに依存せず、対等な三者による協働作業を前提に置いたこと。②協働の本質を相互が理解したこと。なかでも、今日まで活動を続けられたもつとも大きな理由は、③活動に参加する人たちが自ら勇み、他者を尊重しながら周囲を勇ませることができたからではないかと考えている。